
無限ホテルの探偵（臨時）の事件簿

パンター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限ホテルの探偵（臨時）の事件簿

【Nコード】

N6556V

【作者名】

パンター

【あらすじ】

ここは閉ざされた時間の中にある無限ホテル。そして私は臨時のホテル専属の探偵。今日も奇妙な事件が私を待っている。

(前書き)

かなり前に考えたネタです。キノの旅＋カフカの城的な感じで連作にするつもりでしたがなかなか進まず埃にまみれてしまったので蔵出ししてみました。よろしければ一読していただければ幸いです。

ノックをした。

中からノックを解除する音が聞こえた。そしてドアがゆっくり開く。

少しだけドアを開けて顔を出し私の顔を見上げた。

白髪の初老の紳士である。私よりも少し背が低い。

彼はこの部屋の宿泊客である。

「君が、探偵？」

「はい。臨時ですが」

紳士は少しの間私の顔を見つめ軽く頷いた。眼光の鋭さは彼が人生の末に手にしたものだろうか。こちらの心の中まで見透かすような光だ。しかし厳しさはない。むしろ優しいような気がする。

「よかろう。他に頼める人間もないからな。入りたまえ」

紳士はドアを開放した。

私は少し精神的に身構えた。客のいる部屋に入るにはある種の勇氣が必要だったからだ。

なぜならこここのホテルの部屋は普通のそれではない。それは。

「ようこそ、私の心象空間へ」紳士が言った。

そこは風で波打つ緑の草原が地平線の果てまで広がっていた。見あげれば雲ひとつ、ふたつ流れてゆく蒼穹がある。そこには天井はなかった。

私はこの不条理な事実に馴れることは出来なかった。何度経験してもだ。

なぜならここはホテルの客室であるという事実は曲げようがなかったからだ。

そこはこの紳士の拡張され歪曲された妄想現実だった。

「それで、私に何を依頼されたいのです？」

「探して欲しいのだ。少女を。いなくなってしまったのだよ」

「それは、誰なんです？」

「私の無くした宝石だよ」

「宝石ですか。記憶の中で光り輝く宝石が、その少女だと」

「そうだ。私の人生の中で最も輝いている記憶だ」

よくある話だ。少年期に異性に抱いた淡い恋愛感情を宝石だと思
う男性は多い。それを見失ったということか。

「なぜそれはいなくなってしまったんですか？」

「答えたくない」

「ですが、手がかりがないと。この広大な草原で見つけ出すのは困
難ですよ」

「うむ。それは……」

紳士はしばしの間考え込んだ。

「とにかく探せる範囲で探して欲しい。めぼしい場所をわしは知っ
ている」

「そうですか。ではそこを早速調べましょうか」

「たのむ。わしはここからその先へはいけないのだ」

「そうですね」

それは「エッシャー・エフエクトだまし絵効果」という。自分が創りだした妄想に自分が
取り込まれてしまう現象である。

取り込まれてしまうと、存在が曖昧となりやがて消えてしまう。

自分で創りだしておきながらその中へは入り込めないのだ。ただ
眺めるしかない。

だが私とて長時間の滞在は存在の危険にさらされる。

紳士はある一点を指さした。

「この先へとにかく歩いて行き給え。そこに一本の木があり、その
下に小屋がある。そこに彼女はたぶんいる」

「わかりました。では」

私は腰まで伸びた草をかき分けながら進んでいった。

ここで少し私の回想をしておこう。自己紹介の代わりだ。

私はこのホテルの一室で記憶を失いベッドの上で寝ていた。そこ

は自分の部屋なのかどうかも分からない。

ただ少なくともこのホテルに宿泊していたらしい。この無限ホテルに。それは本当の名ではない。

「自分で思い出すしか無いのですよ、お客様」フロントマネージャはそう言った。

「それは一体どういう…」

「失われたものは自分で取り戻すしか無い。そういう事でございませす」

それまでここに宿泊するしかない、ということとで仕事を得た。その報酬が宿泊費となる。

宿泊客のトラブルを解消する探偵になった。ホテル専属の探偵だ。

「それがあなたにふさわしい姿なのです」

「私が探偵だったというのか？」

「さあ。どちらにせよ、あなたもまた求めて彷徨うものなのでは」

「それで、探偵なのか」

「そういう意味ではないのです。さっきの言葉のあやです。結果から原因を導く事はできないのです」

そうして私は探偵になった。今回で三度目の仕事である。このホテルで自らの迷宮に迷った客を導く役割である。

どれくらい歩いただろうか。腕時計型の警告計の警告音はまだ鳴らないから安全深度なのだ。

後ろを振り返ると、部屋の入口と老人の姿は見えなくなっている。

前には紳士の言ったとおり一本の木が見えてきた。その下に掘って建て小屋が見える。

そこに行方不明の少女がいるというのか。

果たして小屋の前に来た私は異様な臭いが小屋の中からする事に気づいた。

これは、まさか。

扉を開けると、予想したとおり少女が死んでいた。

死後時間が経過しているらしく腐敗が進んでいた。この臭いは腐敗臭だったのだ。

紳士の妄想の世界なのに、なぜこれだけ現実味を帯びているんだ？その時、深度警告の電子音が腕から発せられていた。

おかしい。さっきまで安全深度だったのに。これは、つまり…

「とんだジェントルマンだ。ここで私まで死体にするつもりだったのか」

さらに妄想空間を広げているのだ。意図的に、だ。

そっちがそのつもりなら、こっちも

私はナイフを取り出した。

「アリス。もう届かない過去の思い出…」紳士がさっきの場所からじっと草原を眺めていた。

「私も遠い思い出にされては困るのだが…」

「！！！」紳士が驚いて斜め後ろにいる私の方を向いた。

「どこから？…どうやって？」

「私は探偵なんですよ。このホテルの。無限ホテルの、ね」

それでも紳士は合点が行かないようだった。そりゃそうだろうさ。答えを得ようとして私の周囲を見回し、私の側の空間の亀裂に目をやった。

「それは…一体？」

「あなたの心に傷トラウマを付けさせてもらいましたよ。ここから消し去りたい過去の記憶が吹き出してくるようになります。この傷の向こうには消し去りたい記憶が黒い海となって広がっています。死にそんな思いをしましたよ。その海を泳いでここまでたどり着いたんですからね。まとわりついてくる液体状の黒い記憶が何度も口に入ってきて、その不味さと言ったら…」

「私の美しい記憶で作られた空間に傷をつけたというのか！」突然紳士が怒鳴った。「アリスとの美しい思い出の空間に傷を…」

「アリスって、小屋の中で腐っていた女の子のことですか？さっき

泳いできた海に記憶が残っていましたよ。それであなたが子供の頃に犯した罪について理解しました」

「な！なんだと！」

「初恋の少女。別れが悲しくて、思い余って監禁し、衰弱死させた胸糞悪い記憶を飲み込みそうになってしまいました。結局変質者の誘拐監禁殺害事件として捜査されましたが、結局未解決になった。

そりゃそうだ。ここに犯人がいますからね」

「ぐ……」

「それがずつと心に残る後悔と懺悔の重石となって苦しめられていた。半生に渡って。そのせいで独身のまま白髪になる年まできてしまった」

「……」

「そして偶然このホテルに来てしまった。必然なのかもしれませんが。このホテルはそういう場所みたいですから。で、部屋に心の風景が現れてしまった。それまではここではよくあること。ではどうして私まで死体にする必要があつたんです？」

しばらくの間にらみ合いが続いた。

「寂しいからだ。アリスが寂しいと思ったからだ」

ぼつりと紳士が言った。

一人じゃ死体が寂しいと思ったから、だと。

とんでもないジジイだ。

「道連れを作ることが贖罪になると。それは独善だ」

「独善でもいい。それぐらいしか私には償う方法がないのだ」

「いいや、方法がありますよ。自分で償えばいいんです」

「じ、ぶんで……」

「罪は償うべきです。もう十分生きてでしょ。後悔しながらも生への執着から逃れられずに情性で生きてしまった。もういいじゃないですか。アリスに謝罪すべきです」

このホテルには一つの不文律がある。警察不介入である。通常の場合宿泊客が罪人であろうと警察に通報することはない。だがこ

のやり方で罪は償わせることがある。従業員に危害を加えた場合である。

それは強制的に実行できる。このホテルにチェックインした時にサインした台帳にはそれを実行できる力があつた。一種の契約書にもなっているのだった。

紳士は急に体を震わせて何かに抵抗しているようだった。

だが次第に草原の方へ歩いて行くのを止められなかった。

「うわあ。と、止めてくれ。アリスの所へは行きたく、ない」

だが体を拘束し強制する力是否応なく紳士を草原へと引きずり込んでいった。

「お客様。チェックアウトです」

私はフロントと直通の通信機で連絡した。この紳士のチェックアウトは今夜ということが決まっていた。

既に結末は決定していたのだ。

紳士の後頭部が草原の緑に消えていった。もうすぐこの空間も消滅するだろう。

私は部屋から出た。仕事は終了だ。

あす朝部屋は掃除され、新しい宿泊客を受け入れるだろう。ホテルとはそういう場所だ。

私はまた手がかりを見つけられず眠りにつく。

ここは閉ざされた時間の無限ホテル。私はここに囚われた臨時の探偵だ。

ではまた明日。

(後書き)

ホライイベントにも一作発表していただきますので一読していただければ、と。

そう言えば連続小説の方が放置されているような。うーん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6556v/>

無限ホテルの探偵（臨時）の事件簿

2011年8月10日03時16分発行